

昭和16年御杣始祭の記録と記念絵葉書に写る御神木の旅

資料館スタッフ 中畑孝史

1. はじめに

伊勢神宮（以下、神宮）の第59回神宮式年遷宮^{しきねんせんぐう}は、昭和24年（1949）に執り行われる予定で、その祭儀の一環として御用材伐採の開始を告げる御杣始祭^{みそまはじめさい}は、昭和16年（1941）6月に長野県木曾の御料林で厳かに挙行された。この時に伐採された御神木は、沿線の住民に見守られながら、三重県桑名まで運ばれた。

この年は、日中戦争の泥沼化と日米関係の悪化に伴い、国内での戦時体制が強化され、同年12月8日に日本軍が真珠湾を奇襲攻撃し、太平洋戦争が始まった。このような状況下で御杣始祭は、愛国心高揚の手段として活用され、大々的に各新聞やニュース映画が報じ、その後文部省初等科の国語教科書にも掲載された。

また、御杣始祭と御神木奉遷の記念絵葉書が発行され、御杣始祭をはじめ、木曾から桑名までの御神木奉遷の写真が克明に記録された。これらの資料を通じて、御神木と皇室林野局、地元住民との関わりを考察する。

2. 昭和16年御杣始祭の概要

神宮式年遷宮は、約1300年前から20年に1度の頻度で行われる神宮の最大の儀式であり、社殿などを造り替え、神様に新殿に移ってもらう重要な行事である。明治維新後は国家の儀式として行われていたが、戦後は連合軍総司令部（GHQ）によって国家の手から離れ、国民の奉賛によって行われるようになった。

遷宮で造り替えられる社殿はすべて檜^{ひのき}の白木造りであり、伐り出された1万2000本の選りすぐりの良質な御用材が使われる。この神宮式年遷宮は、優れた御用材と伝統的な建築技術が組み合わさることで、神社の建築技術や文化を次世代に伝える重要な役割を果たしている。

御杣始祭は、神宮式年遷宮で使用する御用材を木曾の御杣山^{みそまやま}で正式に伐り始め、伐採運材事業の安全と造営が滞りなく進むことを願う祭事である。この祭りでは、内宮・外宮の御樋代木^{みひしろぎ}（御神木・御祝木とも言う。以下、御神木）を伐採することが、最も重要な役割を果たしており、神事として安全かつ丁寧に扱われる。

第62回神宮式年遷宮では、平成17年（2005）から平成25年（2013）の間に、さまざまな祭事が執り行われた。そして、第63回神宮式年遷宮に伴う御杣始祭は、令和7年（2025）6月に執り行うことが予定されている。

古来より、御神木は木曾から川流しによって運ばれていた。川を下る御神木には多くの参詣者が集まり、停泊のたびに神酒、餅、幟^{のぼり}などが奉獻された。大正9年（1920）の運搬方法に鉄道が導入され、現在ではトラックが用いられているが、地元住民が御神木を迎える姿勢は変わらない。

第62回神宮式年遷宮の際は、御神木はトラックに積まれて運搬された。沿道

の人々はその到着を待ちわび、^{あげまつまち}上松町から犬山市、一宮市、桑名市、津市に宿泊しながら伊勢を目指した。各宿泊地や立ち寄り地では祭りが開催され、盛大な奉祝行事とともに御神木が歓迎された。

戦前の御杣始祭と御神木の運搬を統括した帝室林野局は、大正9年(1920)の御用材の輸送に際して鉄道利用を計画していた。御神木奉遷に関しては、木曾川沿岸の住民や町村から従来通りの川下げを望む声が寄せられたため、木曾から岐阜県坂下町^{さかしたちょう}までは鉄道で輸送し、そこから川下げによる流送を行うこととした。

その後、大正13年(1924)に坂下町と下流の太田町^{おおたちょう}の間に大井ダムが完成し、御神木の川下げが不可能となった。昭和16年(1941)の御神木奉遷についても、木曾川下流の町村長たちから伝統的な川下げで流送してほしいとの希望が寄せられ、太田町からの川下げが実施されることになった。

第59回神宮式年遷宮は、長い歴史の中でも、外国との激しい戦闘が続く戦時下で執り行われた。衣服や履物、食料品といった物資が不足する中、特別な配給を受けながら祭事の準備が進められたという。昭和16年(1941)には山口祭・木本祭・御杣始祭・御船代祭^{このもとさい み そまはじめさい み ふねしろさい}が実施され、昭和17年(1942)には御木曳初式と木造始祭^{こづくりはじめさい}が続けて行われた。さらに、昭和19年(1944)に鎮地祭^{おきひきはじめしき}も行われたが、戦中戦後の混乱により遷宮の継続は一時困難となった。

その後、昭和26年(1951)の假御樋代木伐採式^{かりみひしろぎぼのさいしき}から祭事が再開され、昭和28年(1953)10月に、両大神宮における遷御の儀が無事に完了し、戦時下から続いた第59回神宮式年遷宮が幕を閉じたのである。

3. 当時の時代背景

第59回神宮式年遷宮において、御料林と神宮、内務省と神宮、そして日中戦争の関係が多大な影響を与えたことは明白である。これらの要素が複雑に絡み合い、その時代の宗教的、政治的背景が反映された行事となった。特に、御料林は神宮の造営に必要な御用材を供給する重要な役割を果たしており、そのための森林の管理や保護が一層重視されていた。

内務省は、国家神道を通じて国民の精神的統一を図るため、神宮の祭事を政治的に利用しようとした。これは、戦時中の国民士気を高めるための戦略の一環として行われ、神宮の役割が一層強調されることになった。内務省の影響力の下で、神宮の式年遷宮は国家的なイベントとしての意味合いを強めた。

日中戦争の影響も見逃せない。戦時下において、国家の統一と精神的な支えが重要視され、神宮の祭事はその象徴となった。戦争による資材不足や経済的困難の中でも、神宮の遷宮は断行され、国民にとって希望と誇りの象徴となった。

これらの要素が重なり合い、第59回神宮式年遷宮は宗教的な儀式であると同時に、政治的・社会的な意味を持つ行事となった。そのため、この遷宮は単なる伝統行事ではなく、当時の日本社会における重要な出来事として位置づけられる。

日中戦争は昭和12年(1937)に始まり、昭和16年(1941)にはすでに4年

目を迎えていた。日本は経済的な資源を求め、また国威を示すために中国への侵攻を進めていたが、この頃には日中戦争は泥沼化しており、日本軍は大規模な作戦を展開するも、中国軍は激しく抵抗していた。戦争は長期化し、戦場は広がり、死傷者が増加する一方で、国内では戦争の影響による経済的困難が深刻化した。

戦争の長期化により物資の不足が顕著になり、国民生活に深刻な影響を与え、戦争経済体制が強化され、物資の統制や配給制度が導入された。国民は戦争のための協力を求められ、物資の節約や生産活動への参加が奨励された。

戦争を支えるために国民動員政策が強化され、教育や宣伝を通じて戦争への協力が求められ、愛国心を鼓舞するためのキャンペーンが展開された。

政府は戦争を遂行するため、言論統制や弾圧を強化し、反戦的な意見や異論は許されず、国民は戦争の正当性を信じ込むような情報に接することが多くなるなど、新聞や映画などを通じて戦争の意義が強調された。また、この頃からアジアの他の地域でも緊張が高まり、太平洋戦争へと突入することとなった。

神宮は、天照大御神を祀る神社として、日本の神道の中心的存在である。明治維新以降、国家神道が確立され、神宮はその象徴的存在となり、日本国民や兵士たちの精神的支柱としての役割を果たしていた。

戦時中の日本では、天皇を中心とした国体を強く意識し、国民はその体制を支える重要な役割を担い、国民は戦争に勝利して国を繁栄させることを願い、その祈りは国家の未来に結びついていた。戦争という非常時において、国民は神を敬い、伝統的な価値観を深く理解し、それを徹底することが求められていた。特に、日本の伝統的な精神や思想は、国民の団結と奮闘を促す重要な要素とされた。そのような状況下で、御杣始祭は地域の伝統的な祭りから国家的な意味を持つ祭りへと変貌した。戦時中にはそれが国家のための奉仕や国体への忠誠を象徴する行事となり、天皇の治世や国民の団結の精神が強く込められたと考える。

4. 御神木の伐採と奉遷

昭和16年(1941)6月3日、帝室林野局木曾支局上松出張所小川御料林内中立神宮備林のツメタ沢上流にて御杣始祭が行われ、御神木が伐採された。伐採された御神木は、神宮に近い三重県桑名市の帝室林野局名古屋支局桑名貯木場まで奉遷され、神宮に運ばれるまで安置された(図1)。

御神木は伐採された日のうちに、ツメタ沢から赤沢伐木事業所まで木馬と作業軌道を使用して約2km奉遷し、赤沢伐木事業所の奉安所で約3か月間安置された。9月5日に赤沢伐木事業所を出発し、森林鉄道で約13.4kmを奉遷した。続いて、地元住民により軌道上約1.5kmの距離を奉曳して、上松駅に隣接する上松運輸事務所内の奉安所に安置された。ここで1か月間安置された後の10月5日、上松駅から多治見駅を經由して美濃太田駅まで鉄道で107.4km輸送され、駅から木曾川岸の奉安所まで地元住民による奉曳で約1.5km運ばれた。

10月6日から9日の4日間は、古式ゆかしい川下げにより木曾川の約65km

を通じて、帝室林野局名古屋支局桑名貯木場の奉安所まで奉遷された。10月6日に木曾川での御神木の水入れが行われ、坂祝村を經由して犬山町まで川下りによる奉遷が行われ、さらに10月7日には犬山町から笠松町を經由して起町まで同じく川下りで移動した。続いて、10月8日に起町から木曾川と長良川を結ぶ船頭平閘門を通過して桑名市一ノ鳥居に至るまで川下りが続き、10月9日に桑名市一ノ鳥居から桑名貯木場まで揖斐川を川下りで運ばれ、木曾から桑名まで総延長約190km、4ヶ月を要した御神木の旅が終了した。



図1 御神木の旅の経路

昔から「御神木を拝めば、伊勢へお参りしたと同じことになる」と伝えられてきたように、神宮への参拝が困難な人々にとって、御神木は神聖な力を象徴する存在であった。地方の人々は、この御神木を通じて神宮への祈願を果たしたとされる。そのため、御神木は単なる材木を超えた神聖な存在であり、その運搬も祭事の一環として地域社会の祈りと協力によって進められる重要な儀式である。

以下では、伐採された御神木がどのようにして木曾の深山から麓へ、そして川を下って目的地である桑名まで運ばれたのか、当時の記録や新聞記事をもとに、その壮大で神聖な工程を時系列に沿って詳しく見ていきたい。御杣始祭の祭事に始まり、御神木の伐採の様子、各奉遷段階における地元住民の協力、そして川下りの伝統儀式の様子がどのように行われたのかを、当時の言い回しを残して描写する。なお、名古屋支局付知出張所出ノ小路御料林からも御神木4本が伐採され、中津川駅から桑名まで上松分と共に奉遷されたが、この付知分は省略する。

6月3日、晴れ。中央線の上松駅に隣接する帝室林野局木曾支局の上松運輸事務所の前で、森林鉄道の一列車は三両編成で運行され、約150名の乗客を乗せて約1時間半の旅の末に赤沢伐木事業所に到着した。その後、七番列車まで運行が続き多くの乗客を運んだ。また、王滝や大桑の近隣の村から老夫婦や若者たちが観覧に訪れ、御杣始祭の開催を待ち望んでいた。

古式ゆかしい荒木造り（釘を用いない縄結び）の祭場の中央四隅には五色の幣みてぐらが立てられ、古の風情が漂っている。その中で、樹高30m、胸高直径59cmの内宮御神木と、30m離れた場所にある樹高31m、胸高直径35cmの外宮御神木が、注連縄で飾られている。

恭しく奏でられる太鼓が深山の静けさに響き渡り、紺碧の空に溶けていくと、集まった1,500人の気配がどこに消えたのか疑うほど、瞬時に千古の静寂に戻っ

た。奉仕員たちは玉砂利を引いた修祓場^{しゅぼつじょう}に進み、祭儀が厳かに進行した。斧入れ式の後、参列者全員が一礼し、祭場を静かに退下した。この間、参列者たちは御神木の前に立ち、荘厳な神儀に深い敬意を感じた。こうして再び外宮御神木の前でも同様の儀式が行われた。

祭事が無事に終了した後、正午過ぎから御神木の伐採が始まった。選ばれた14名の優秀な杣夫たちが白い素襖^{すおう}と烏帽子^{えぼし}を身にまとい、二班に分かれて斧を振ると、真っ白な木屑が檜の香りと共に周囲に舞い散った。約1時間後には、巨木は三方から削られ、三脚で支えられる状態になった。内宮御神木の「右横山一本ねるゾー」とのかけ声と共に、白衣の袖が高らかに振り上げられ、全力で振り下ろされた斧によって伐倒された。その後、外宮御神木も「斜め登り山一本ねるゾー」のかけ声で見事に伐倒された。

伐倒された御神木は、玉切り^{たまぎり}や頭巾^{とうきん}、目戸孔^{めどあな}、切判^{きりはん}などの処置が施された。玉切りとは所定の長さに幹を切断することを指し、頭巾は運搬時の損傷を防ぎ、滑りを良くするために両端をアーチ状に削ることである。また、目戸孔は運搬時に吊り下げたり、引き出したりするための綱を結ぶために開けた穴であり、切判は神宮や宮内省などの印を彫刻することを指す。

その後、60名の運材夫によって木馬に載せられた御神木は、深山幽谷に相応しい木遣りの音頭に合わせて、傷つかないように大切に作業軌道まで引かれた。下流の赤沢伐木事業所に設けられた奉安所まで、機関車で2kmの軌道を引かれ安置された。

9月5日、晴れ。秋の気配がようやく際立つ赤沢奉安所に安置されていた御神木二柱の前に、帝室林野支局の職員約30名と杣夫23名が参列し、御山に木魂せよと唄う木遣りの声が勇ましく響いていた。御神木は、森林鉄道用に特別に仕立てられた総檜造りの奉安車に載せられ、「大一」の旗が美しく、注連縄に清められ、五色の弊に祀られた。前後の車両には関係する職員が乗車すると、森の浄域に響く汽笛とともに静かに出発し、深い森林を縫い、深い沢を渡りながら深山を下る。

朝霧が晴れた頃、山の向こうに御嶽山の美しい姿がはっきりと浮かび上がる。御神木は木曾川のほとりにある寝覚発電所前に到着し、ここから御神木は住民による奉曳行列に任された。「木曾の御山に育った檜、お伊勢神宮の宮柱」という歌声が、揃いの浴衣に白鉢巻きの里人たちによって歌われ、神楽の囃しが先頭に立った。上松奉安所までの約1.5kmの軌道を、上松町の国民学校の生徒をはじめとする約600名の各種団体が奉仕した。歓喜の象徴ともいえる「エイヤ、エイヤ」というかけ声が響き、行列は周辺から集まった里人たちに迎えられながら、緑にあふれる木曾川の流れに影を映して進んだ。上松運輸事務所内の奉安所に無事到着し、感激のうちに奉安を終えた。午後1時から全町民を挙げての奉祝の祭礼が行われ、純朴な山里の人々の限りない感激は終日、奉拝者を満たした。太々神楽や浦安の舞が奉納され、午後5時の閉祭まで続いた。

10月5日、晴れ。前夜から降り続いた雨のせいで、誰もが今日の天気を心配し

ていたが、秋とはいえ、夏をも超える暑さの快晴となった。御神木は榊や注連縄、国旗、「大一」の印がある幟などで飾られた無蓋貨車に載せられ、関係職員が乗った客車を連結した臨時列車が編成された。山々の秋色がより一層濃くなった木曾路・美濃路を、沿道の多くの人々に見送られながら、多治見駅を経て、予定通り午後3時26分に美濃太田駅に到着した。中央線の上松駅から太多線たいたせうの美濃太田駅間の各駅では、数分から十数分間停車し、参拝者の利便を図った。どの駅も構内外に様々な団体や学校の生徒が多く集まり、誠心をもって迎え送る光景が広がっていた。さらに、20年に一度のこの盛大な儀式を目の当たりにしようとする参拝者たちは、各駅で押し合いへし合い、身動きもできないほどの混雑を見せていた。また、駅間の沿道では、野良仕事に励む老若男女が土下座をして遠くから拝み、国民が神宮を深く崇敬する心から来る感動の場面を見ることができた。

美濃太田駅には、岐阜県の総務部長をはじめ、鉄道や町の関係者、帝室林野局員が出迎え、太田駅長の指揮のもと、すぐに貨車から御神木が降ろされた。同町の警防団員の協力で、台車にそれぞれの御神木を載せた。同5時になると、笛や太鼓の音が響き、皇大神宮と豊受大神宮の神旗や「大一」と大きく書かれた旗が先頭に立ち、国旗や献燈、笹竹、注連縄で装飾された町内を、さまざまな団体や一般町民を含む大勢の人々が奉迎する中、警防団員や国民学校の生徒たちの手によって、約1.5km離れた木曾川の河原へ向かった。御神木の重さおぼろで轍がきしむ音も神々しく、夕暮れ迫る午後6時ごろ、奉安所に運ばれた。

奉安所の式場はもちろん、道筋は数日前から国民学校の生徒や警防団、青年団など多くの人々によって清掃され、奉安所は四方の周囲に青竹で作った矢来が設けられ、中央には真薦まこもが敷かれ、左右には真榊まかきが立てられ、両翼には幕が張られ、神旗や幟が数十も立てられ、町民の崇神の心が表れた。

こうして眩い中秋の明月が中天に輝く午後8時から、松明が燃え盛る中で町主催の奉迎式が行われ、同町国民学校の女子児童8名が浦安の舞を奉納し、町の有志による神楽や獅子舞が演じられた。式が終了すると、川下げの光栄に感激した町民たちは、屋形相撲を始め、さまざまな催しを行い、奉安所は夜通し参拝者が途切れることなく、町全体が歓喜の坩堝うつぼとなった。

10月6日、晴れ。美濃太田の木曾川の河原で一夜を過ごした御神木は、瑞々しい鱗雲うろこぐもに包まれながら夜が明け、秋の日和の中、朝8時から奉送の儀が前夜と同様に行われた。

午前10時から水入れの儀が行われ、警防団員の協力のもと、外側を藁菰わらこもで覆い、川岸へと運ばれた。御神木は、御送船の舷側に一柱ずつ太い麻縄などで目戸穴を通して緊締し真榊が捧げられた。御送船には天照皇太神宮などの神旗が中央に掲げられ、五色の幣や「大一」の旗、旭日旗などが立てられ、正午までに準備がすべて整った。御送船に随伴する警備船には、帝室林野局の両支局長をはじめ、局員や造神官支庁の職員、警察官が乗り込んだ。

午後1時、太田町長以下の奉送船や囃子を奏でる町の屋形船を従えて、町民の見送りの中、二班に分かれた御送船は警備船を伴い、船列を組んで木曾川を下り

始めた。

可見郡土田村の下流にある木曾川の最難所、俗に「大洞可見合の難場」と呼ばれる箇所では、激しい波が舷側を打ち、飛沫が船内を濡らした。しかし、神明の加護と舟夫の熟練した技術によって難なくその箇所を越え、ゆう泉寺下流の急流や深潭、奇岩怪石の間を縫って進んだ。堤防上では、多数の奉拝者が跪いて迎える中を下り、午後3時には犬山町に到着。町主催の奉迎式が行われ、御神木はここで滞泊することとなった。

真夜中から静かに秋の雨が降り続き、雨水がポタポタと落ちる音がかすかに響いていた。古くから、御神木が犬山橋を過ぎる際には「浄雨がある」との伝説があり、その光景を実際に目の当たりにした人々の感激はひとしおであった。この夜も参拝者が途切れることなく訪れた。

10月7日、曇り時々少雨。夜間の雨も上がり、風も静かになり、絶好の奉遷日和となった。午前9時に町の奉送式が終了し、白帝城下を静かに離れた御送船の列は、町民のブラスバンドや祭り囃子に送られながら、広い木曾川を滑るように下っていった。秋色に満ちた濃尾平野の堤防には、多数の子供たちが奉送のために集まっていた。途中の御繫留地には祭壇が設けられ、神酒や食べ物、御旗が奉られた。

二班に分かれた護送船は、笠松町上流の東海道線の鉄橋付近で合流し、午後零時に岐阜県学務部長や笠松町長の歓迎を受けながら笠松町に到着した。直ちに祭典が行われ、2時間の繫留の後、発動機船を先導船として各所に立ち寄りながら、午後4時30分に起町金比羅神社の下に到着した。奉迎式典が終わる頃には雷鳴とともに秋雨が強く降り始めたが、時が過ぎると雨は止み、星々が輝く夕空に煙火の光が美しく映えた。

遠く一ノ宮方面からも市民や学生などの奉拝者が引きも切らなかった。また、川祭りに向けて準備され、御滞泊地の近くに停泊していた2隻の大きな船に万灯が灯された。有志による手踊りや獅子舞、芝居などの催しもあり、賑わいを極めた。

10月8日、晴れ。午前8時30分、町長をはじめとする人々によって奉送式が行われ、二班に分かれて9時に出発した。下流へ向かう水流はますます広がり、長い堤防には奉拝者が集まり、陽気が大地に満ちていた。

午前10時40分、朝日村西中野を出発し、南風が徐々に吹き始めた。長岡村の馬飼で二班が合流し、午前11時40分に出発したが、強風のため予定より遅れて午後2時15分に閘門に到着した。そこで木曾・名古屋支局長や桑名市長などの警備船を先頭に、長良川に入り、強風にも難航しながら尾張大橋を経て揖斐川に入った。

午後4時50分、奉迎の煙火の轟きと、学生が「君が代」を吹奏し、市民が見守る中、無事に一ノ鳥居下に到着した。三重県知事をはじめとする多くの人々が参列し、奉迎式が行われ、人長の舞が奉納された。この場所で滞泊となった。

10月9日、晴れ。桑名市民の真心こもる奉拝を受けながら、一ノ鳥居下で御神木は、川下りの最後の夜が明けた。秋晴れの空に神旗をなびかせ、午前9時30分より奉送の儀を挙行し、午前10時に雅楽の音とともに市の奉送船に随いて西の水門から桑名貯木場に到着した。

太田町から桑名市にかけての木曾川沿岸では、滞在地や各繫留地に竹矢来を巡らせて祭りの場を設け、注連縄を張り、幟や国旗を立てて、老若男女問わず集まり、心から御神木を迎え祭儀を行った。町村長や各種団体の代表、学校の生徒たち、そしてその他の一般の人々も参加し、非常に盛大な儀式が行われた。繫留地の川沿いは人で埋まるほどの賑わいを見せ、各繫留地の間にある木曾川の堤防や川原にも、沿岸近くの各種団体、中等学校の生徒、国民学校の児童、一般の奉拝者たちが列をなして遠くからお参りする様子は、その数を数えきれないほどであり、国民の敬神に対する気持ちに感心した。

桑名貯木場に到着後、直ちに御送船から御神木を解いて藁菰を取り外し、移動後の午前11時35分に水面上に柱を立てて屋根で覆った奉安所に安置した（写真1～4）。午後2時より愛知県知事をはじめとする参列の下、帝室林野局の奉安式、桑名市の奉安祭が行われ、続いて貯木場の施設内で直会が開催された。午後4時、万歳の声の中、すべての行事が滞りなく終了した。



写真1 桑名貯木場（到着）



写真2 桑名貯木場（藁菰の取り外し）



写真3 桑名貯木場（奉安所へ移動）



写真4 桑名貯木場（奉安所）

写真1～4は筆者が収集したものであり、桑名貯木場の様子を補完するために掲載する。

開門から桑名一ノ鳥居に至る強風の中での難航も、何の支障もなく万端の儀式を終えられたのは、すべて神明の加護による。さらに、今回の奉送においては、多くの地元住民が心をつにし、御神木に対する深い敬意と感謝を表した。地元の人々は御神木を神聖視し、祭りを通じてその存在に感謝の意を示した。各地で盛大に執り行われた祭典では、老若男女が集まり、御神木を迎える心温まる姿が見受けられ、地域の信仰と絆が一体となった瞬間が共有された。これらの光景は、戦時下の影を感じさせないほどの活気に満ちており、地元住民たちの崇神への強い想いを象徴するものであった。

5. 御杣始祭と戦時下の宣伝工作

御杣始祭が新聞報道・ニュース映画・国語教科書を通じて愛国心高揚の手段としてどのように活用されたかを分析する。御杣始祭の当日は、名古屋と松本のラジオ放送局から局長を含む16名の技術員が現場に常駐して、祭儀の実況を録音し、午後1時から約45分間にわたり、御神木の伐採の実況を放送したという。また、造神宮支庁や日本ニュースの撮影班も現場で実況撮影を行い、さらに東京、名古屋、長野から特派された11社の新聞社が取材に訪れた。

(1) 新聞報道

御杣始祭に集まった新聞記者は25名に達し、御杣始祭の様子とその意義を伝えた。その新聞記事を写した写真が昭和16年(1941)10月20日に発行された『昭和16年6月3日 第五十九回神宮式年遷宮 御造営御杣始祭記念写真帳』(以下、写真帳)に収録されている(写真5)。この写真帳は木曾支局が発行し、名古屋市の澤田文精社が印刷を担当した。当時の新聞記事が1枚の写真に集約され、報道量の多さと注目度を記録として後世に伝えている。

記事では、祭事を伝えると伴に、御杣始祭において皇国の民が一体となり、神への感謝と祈りを捧げることの重要性が説かれている。特に臨戦下にあって国民の精神が高まり、未来への祈りが一層強くなる様子が表現されている。また記事は、「国体の明徹」を唱え、敬神思想の普及が急務であるとし、国民が皇室と神道に対する敬意を深め、国の安寧を祈る姿勢の重要性を訴えている。さらに、日本精神の昂揚と国民全体の団結が求められている点も強調されている。



写真5 御杣始祭盛儀の報道(写真帳より)

その他の記事では、神宮儀式課長が、御神木を川で運ぶ儀式について「戦時下

において日本国民の神や祖先を敬う気持ちを高めるものであり、国民がこの神聖な行事に全力で取り組む姿に大いに心強さを感じる」と述べている。

また、皇室林野局の両支局長の寄稿では、御用材の供給とともに国防に必要な木材や木炭の増産を目指して職員一同が事業に励んでいること、さらに神宮の御造営が戦時下においても国民の精神を高めるものであり、西洋諸国にはない誇るべき伝統であると記されている。

これらの新聞記事は、戦時下における日本の国民精神の重要性と、皇室への信仰が如何にして国民の団結を促進するかを示している。特に、神道と皇室が国民にとっての精神的支柱であり、国家の存続や繁栄はこうした精神的な価値観に根ざしているといえる。御杣始祭という具体的な儀式を通じて、国民が神道に対する敬意を示すだけでなく、国防や物資供給に関する実務的な側面も重視されている。これにより国民の意識が高まり、戦時下における国の防衛や復興に向けた意欲が湧くことが期待される。

このような新聞記事が発信されることは、戦時下における国民の精神的な団結が求められると同時に、国家の統制が色濃く反映されていることを示している。これらの記事は国民に対するメッセージとして機能し、国家への帰属意識や信仰心を高める役割を果たしたと言える。

(2) ニュース映画

日本ニュースは、昭和15年(1940)から終戦を経て、昭和26年(1951)まで製作されたニュース映画で、戦時中は、日本軍や内務省の検閲を受けた後、毎週映画館で封切られ、国民の戦意高揚に用いられていた。

御杣始祭は、「謹写」**「神宮式年遷宮 御杣始祭」**と題して、『日本ニュース第53号』の中で上映された(表1)。この「神宮式年遷宮 御杣始祭」は、2024年、ウェブブラウザからNHKアーカイブスの公式サイトにアクセスして視聴できる。

この映像には、修祓や斧入れを含む御杣始祭の祭事が全て記録され、林内には観覧者の姿も映し出されている。御神木を伐採する様子が詳しく捉えられ、最後に木馬で奉遷される場面で締めくくっている。また、御杣始祭を説明する以下のナレーションが間隔を挟んで3回収録されている。

①「皇大神宮式年御遷宮は、昭和24年度に執り行われさせていただきますが、大御神のご神体を奉安すべき、最も貴重なる御樋代木を伐採するにあたり、6月3日木曾の御料林で御杣始祭が関係者他多数参列のもとに、いと厳粛に行われました」

表1 『日本ニュース 第53号』の構成

順番	題名	時間(分)
1	神宮式年遷宮 御杣始祭	2:05
2	世界最初の心臓撮影成功	1:30
3	独シュナイダー夫人 来朝演奏<週間話題>	1:09
4	神戸にキリン3頭着<週間話題>	0:31
5	静岡の隣組大運動会<週間話題>	0:43
6	第15回早慶対抗水上競技会<週間話題>	1:52
7	援蔣物資の安全地帯抛出	0:42
8	壮烈! 中原大殲滅戦	1:51

②「御杣始の祭りとは、御杣の山入りに際し、御料材中から選ばれた最上の美材、樹齢270年といわれる御神木の下で、御杣山におわす神に伐採の安全を祈るため奉仕される、誠に盛大な祭儀であります」

③「切り出された御神木は、長さ1丈8尺に造って、アカツカ事業所付近の奉安所に安置されました」なお、1丈8尺とは、5.4mで、アカツカ事業所とは正しくは赤沢伐木事業所のことである。

「神宮式年遷宮 御杣始祭」に関するニュース映画は、その順番、尺、そして「謹写」という表現を合わせて考慮すると、非常に計算されたプロパガンダとした役割を果たしていることが浮き彫りになる。これらの要素を総合的に分析した。

御杣始祭は、ニュース映画『日本ニュース 第53号』の最初の項目として報じられており、その尺は2分05秒と最も長い。

最初に取り上げられるニュースは、観客に最も注目してほしい話題であることが多く、御杣始祭が国家的な価値を持つ儀式であることを強調し、最も重要なニュースとしての位置づけしている。

尺の長さが2分05秒は、他のニュース(31秒から1分52秒)に比べて長い。これにより、観客に神聖な儀式の重要性をじっくりと伝え、国家の伝統と神道の尊厳を印象づける狙いがあると考えられる。

「謹写」という言葉は、神聖な儀式に対する敬意を持ち、正確に描写することを示している。「謹写」という言葉によって、御杣始祭は単なるニュースとして扱われるのではなく、国家の神聖な儀式としての特別な意味を持つことになる。この表現は、観客に対して儀式の重みを認識させ、尊重を促すメッセージを発信している。

戦時下においては、国家や皇室、神道が国民の精神的な支柱として機能することが求められる。「謹写」という表現を使用することで、御杣始祭が国民にとっての精神的な象徴であり、戦争の厳しい現実の中での安定感を提供する役割を果たすことを強調している。

御杣始祭のニュースが最初に配置されていること、尺が長いこと、そして「謹写」という表現が使われていることから、ニュース映画全体の構成はメッセージを持つことになる。

御杣始祭を最初に持つてくることで、戦時下にあっても日本の伝統と神聖性が大切にされていることを示し、この儀式が持つ意味が強調されることで、国民に対する精神的な鼓舞の効果が期待される。

御杣始祭を通じて、国民に対して「私たちは伝統を守る国民である」という意識を植え付け、戦争の困難な状況にあっても国家としての一体感を高める意図が垣間見える。

他のニュース(科学技術や娯楽など)は相対的に軽い内容が多く、最後には戦争の現実が示されることで、御杣始祭が持つ重みと神聖性が際立っている。この流れにより、戦争の厳しさの中でも、伝統的な儀式が国家の精神を支える重要な

要素であることが印象づけられている。

「神宮式年遷宮 御杣始祭」に関するニュース映画は、順番、尺、「謹写」という表現の組み合わせによって、戦時下における日本の伝統と神聖さを強調する強力なプロパガンダとして機能している。このニュースが最初に長尺で報じられ、「謹写」として敬意を持って取り上げられることで、国民に対して精神的な基盤と結束感を提供し、戦争の現実に対する精神的な支えとなることを目指しているのが明確である。このような構成は、国家の正当性を強化し、戦時下における国民の意識を高めるために意図されたものであり、神道や伝統の重要性を再確認させる役割を果たしている。

(3) 文部省初等科の国語教科書

昭和17年(1942)12月21日に発行された『初等科国語 五』は、戦時中の日本における国民教育を目的とした教科書であり、全二十章で構成されている。特に、第一章の「一 大八洲」から順に「二 弟橘媛」、「三 木曾の御料林」、「四 戦地の父から」の四つの章が重要であると考え、それぞれの内容とその関係性を分析した。この中で第三章の「木曾の御料林」が、昭和16年(1941)の御杣始祭を題材としている(別紙1)。

「一 大八洲」では、日本列島(八洲=日本の島々)の起源や神話的な由来が描かれ、日本は神々によって守護され、統治される神聖な土地として紹介されている。自然の豊かさや山の幸、海の幸が強調され、特に神道を通じて日本の国土の神聖性が表現されており、自然と国民の調和が意図されている。

「二 弟橘媛」では、日本武尊の東征にまつわる神話が紹介され、弟橘媛が夫に代わって海神を鎮めるために自らを犠牲にしたエピソードが描かれている。この物語は、忠誠心や自己犠牲の精神を示し、国家や家族のために尽くすことの重要性を伝えている。ここでは、精神的な結びつきと倫理観が強調されている。

「三 木曾の御料林」は、御杣始祭の物語で、神宮が古来より20年ごとに新たな社殿を御造営する遷宮について述べられている。明治天皇の意向で木曾の御料林中に神宮備林が定められ、この備林によって、造営のための御用材が常に供給されることが確保される。その中で、昭和16年(1941)には内宮・外宮の御神木を伐り出すための御杣始祭が開催され、祭事が厳かに執り行われた。このような祭りを通じて、神聖な木を伐採することの重要性が強調され、神宮の神聖さと日本の宗教的伝統が受け継がれていることが記されている。

「四 戦地の父から」は、戦時中に父親が子供に宛てた手紙で、家族への愛情と戦地での経験が描かれている。父は子供たちの存在が自分の力になっていると述べ、彼らの成長を心から願っている。戦地の生活や仲間との絆、日常の小さな喜びを描きつつ、厳しい現実にも触れ、希望を持ち続ける姿勢が強調されている。

このように、「一 大八洲」から始まることで、日本の神聖な国土としての起源が強調され、神々によって守られた土地としての誇りが国民に植え付けられる。

「二 弟橘媛」では、神話における自己犠牲と忠誠心が表現され、国家や家族へ

の尽くしの重要性が伝わる。次に「三 木曾の御料林」では、具体的な国土管理の象徴として、国家が自然を大切にしながら統治している姿が示され、神聖な流れが資源管理へとつながる。そして「四 戦地の父から」では、戦時中の家族の絆と希望が描かれ、国民が厳しい状況の中でも希望を持ち続ける姿勢が強調されている。

全体として、これらの章は相互に関連し合い、国土の神聖性、自己犠牲、皇室と神宮の不動の関係、そして戦時中の家族の絆と希望の流れを形成している。このような構成は、国民に対して国家への忠誠心や自己犠牲の精神を育む狙いがあったと考える。また、天皇の意向や皇室の重要性が強調され、国家神道と皇室崇拝の思想が反映されている。

第三章の「木曾の御料林」では、神宮における重要な伝統行事である遷宮と、木曾の御料林における神宮備林の役割に焦点を当てている。神宮では20年ごとに新しい社殿を建てる遷宮が行われ、持続的な資材供給が不可欠とされている。このため、昭和16年(1941)には、内宮・外宮の御神木を伐り出すための御杣始祭が厳粛に執り行われ、その重要性が強調されている。

また、「木曾の御料林」は、明治天皇の意向で定められた神宮備林として、国家的に重要な資源の管理を象徴している。この備林は、檜の供給源として機能し、神宮のための御用材を持続的に提供する役割を果たしている。明治天皇がこの備林に特に関心を寄せたことは、皇室と神宮の関係、そして国家の責任感を象徴している。

「木曾の御料林」は、自然と神聖さ、国家の責任が結びつく重要な事例として位置づけられており、国民に対して神聖な使命感を促す要素を持っている。日本人としての誇りや国家への忠誠心がこのような伝統行事を通じて強化され、戦時中の国民教育における重要な位置を占めていると考える。

6. 御杣始祭と御神木奉遷の記念絵葉書

戦時中、絵葉書は戦地と家族をつなぐ重要な通信手段として利用され、短文で済むため、書く時間が短く、手紙よりも手軽であった。また、絵や写真は視覚的に直感的で、喜びや悲しみなどの感情や情報を迅速に伝えることができた。視覚的に美しい絵葉書は、戦地にいる兵士にとって安心感や励ましを提供し、軽くて持ち運びが容易で、比較的安価なため、慰問品としても適していた。

絵葉書は、ニュース媒体としても機能し、情報を広く一般に伝えるための手軽なツールだった。さらに、プロパガンダの一環としても利用され、愛国心を高め、戦争を支持するメッセージを広める役割を果たしていた。このように、絵葉書は多面的な役割を担い、戦時中も多くの絵葉書が発行されていた。

現在確認されている御杣始祭と御神木奉遷を記念した絵葉書は、タトウ(紙製の保護袋)に入った3組の15枚組と1組の2枚組で、合計4組47枚である。

内訳は次の通り。帝室林野局木曾支局(以下、木曾支局)が発行した『第五十

九回神宮式年遷宮御造営御杣始祭記念絵葉書』(以下、御杣始祭記念絵葉書)の15枚組。『第五十九回神宮式年遷宮御造営御神木奉遷記念絵葉書』(以下、御神木奉遷記念絵葉書)の15枚組。さらに、帝室林野局名古屋支局(以下、名古屋支局)が発行した『第五十九回神宮式年遷宮御造営用材御樋代木奉遷記念絵葉書』(以下、御樋代木奉遷記念絵葉書)の15枚組である。また、『第五十九回神宮式年遷宮御造営御杣始祭記念絵葉書』(以下、記念品絵葉書)は2枚組で、御杣始祭の当日に記念品として頒布された(写真6)。

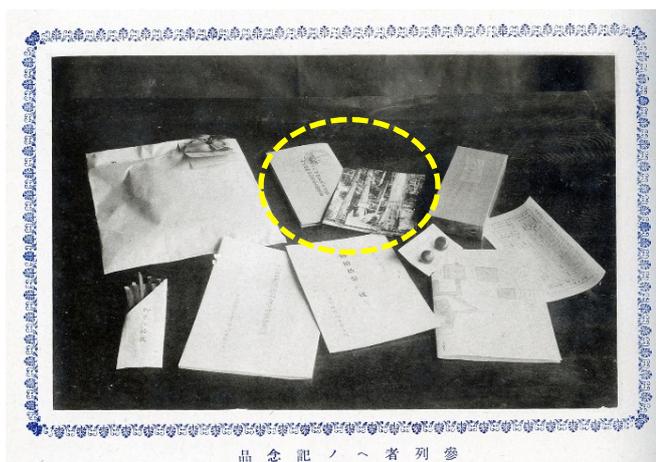


写真6 参列者への記念品(写真帳より)
記念品絵葉書(タトウ・絵葉書)

前述の写真帳は、御杣始祭の準備から参列者の帰路までを収めた61枚の写真を収録し、そのうち13枚は御杣始祭記念絵葉書と同じ写真である。この写真帳には、記念絵葉書やニュース映像にはない、当日の上松駅や祭場、祭事、運搬用の木馬や運搬車の様子も収められている。

記念品絵葉書のタトウには、神宮御造営材御杣始祭記念・昭和16年6月3日の記念スタンプが押印されている(写真7)。もらった人々にとって、特別な思い出としてその絵葉書を大切にし、スタンプが押されていることで、その時の出来事や感動がより鮮明に感じられた。スタンプ自体が一種の証しとなり、喜びや感謝の気持ちを抱き、特別な価値を感じたのではないかと想像する。

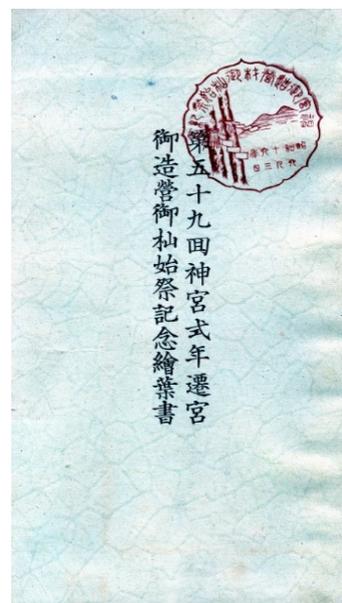


写真7 記念品絵葉書
タトウ

御杣始祭記念絵葉書のタトウには、外宮御樋代木の伐採を基にしたイラストが描かれている(写真8)。その背景にある2本の大木は、内宮・外宮の御神木を象徴していると推測する。一方、御神木奉遷記念絵葉書のタトウには、犬山町附近での川下りの様子を基にしたイラストが描かれている(写真9)。このイラストは大きな円の中に描かれ、周囲に雲を模した図が描かれている。神宮は太陽の神である天照大御神を祀っており、天照大御神は太陽そのものを象徴している。このイラストは、雲の合間に現れる太陽を描き、天照大御神を具現化していると推測する。また、円の形状は円満や完成を表し、神聖な儀式の完遂を暗示している。どちらも木曾支局の発行で、タトウに描かれているイラストのタッチが似ている。また、その絵葉書の宛名面には「名古屋市神楽町 澤田文精社 印刷」と印字され

ている。澤田文精社は名古屋に拠点を置き、「鳥瞰図」と呼ばれる上から見たような立体的な風景画を特徴とする図絵を数多く刊行している。鳥瞰図の他にも、絵葉書や名所案内などを取り扱い、その図絵は鮮やかな色彩を用いて活気あふれる情景を描いている。前述の写真帳と記念絵葉書は、木曾支局が澤田文精社に一括発注したものとする。掲載写真も木曾支局が選定し、校正を経て、木曾支局の意図が反映された印刷物となっている。写真帳はその発行までに約4ヶ月半を要し、記念絵葉書も写真帳と同じ頃に発行されたと推測される。



写真 8 御神木奉遷記念絵葉書タトウ

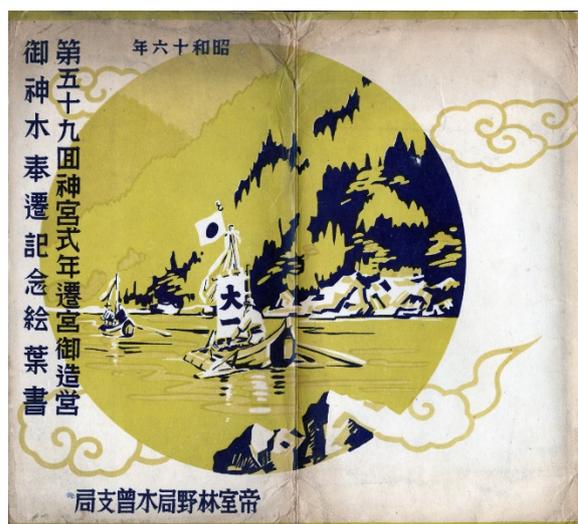


写真 9 御神木奉遷記念絵葉書タトウ

名古屋支局が発行した御樋代木奉遷記念絵葉書の印刷所は不明であるが、名古屋近隣の印刷所と推測する。このタトウには、前述した2枚のタトウにはない特徴がある(写真10)。それは、木曾御料林の深山から下る機関車が貨車を連結して走る様子が描かれていることである。また、線路に平行して木曾川が桑名へ向かって流れており、木曾と桑名が木曾川で繋がっていることを示唆している。さらに、旗竿には「大^{たい}一」と記された大きな旗がたなびいている。

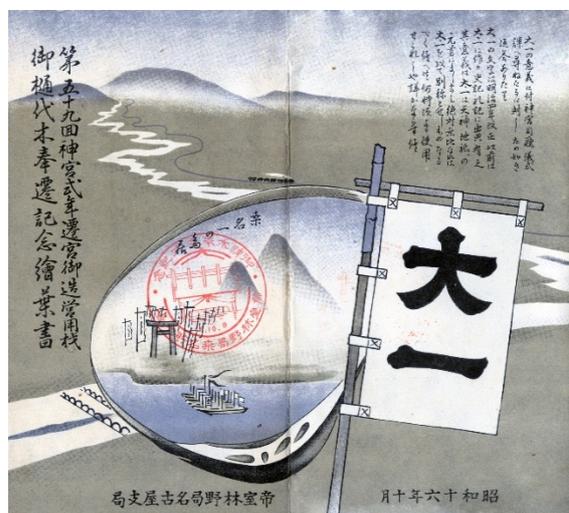


写真 10 御樋代木奉遷記念絵葉書タトウ

そして、次のような記述が印刷されている。「大^{たい}一」について神宮司庁儀式課に問い合わせたところ、「大^{たい}一」は明治4年改正以前「太^{たい}一」と表記されており、『史記』や『礼記』にその出典がある。「太^{たい}一」は天神地祇の最高神であり、絶対無比の存在を意味する。「大^{たい}一」は「太^{たい}一」の別称として使われていたが、表記変更の理由は明確ではない。補足すると、『史記』は中国の歴史書で、古代の歴史や伝説を記録したものであり、『礼記』は儒教の重要な経典の一つである。また、天神地祇とは、日本の神道における天の神(天神)と地の神(地祇)を指し、自然や土

地を司る神々の総称でもある。表記変更後の平成5年(1993)第61回神宮式年遷宮まで「大一」が使われ、平成25年(2013)第62回神宮式年遷宮から再び「太一」が使われた。

タトウ中央には、桑名の特産品である「はまぐり」の輪郭を枠にした図が描かれている。はまぐりは「その手は桑名の焼き蛤」として広く親しまれ、伝統的な日本の行事や祝い事に欠かせない食材である。さらに、この図の中央には「桑名一の鳥居」のイラストが描かれ、その前には御送船が並んでいる。なお、「桑名一の鳥居」は、神宮式年遷宮ごとに伊勢神宮の宇治橋の鳥居を移して建て替えられていたもので、伊勢への入り口を示し御神木の滞泊場所である。

このタトウは、木曾から桑名へ、鉄道と川下りという2つの異なる輸送手段を駆使して、神宮御造営で最も重要な御神木が運ばれたことを強く印象づけている。近代的な鉄道技術と、伝統的な川下りが融合した運搬方法は、日本の近代化と古くから受け継がれてきた信仰や伝統の調和を象徴しており、神宮の神聖な儀式がどれほどの工夫と労力を伴っているかを描いている。さらに、奉安所のイラストと昭和16年10月9日の日付が記された皇室林野局桑名貯木場の記念スタンプが押印されている。スタンプを押すことで、受け取る側に神宮御造営の重要性を伝え、特別感を与える役割を果たしている。

47枚の記念絵葉書には、御杣始祭を中心に、御神木の伐採前の準備から奉遷に至るまでの様子が写されている(別紙2)。陸上での奉遷や川下げ、住民による奉曳といった儀式的に重要な場面の写真が絵葉書として印刷された。参列者が森林鉄道に乗り込む様子から桑名貯木場での奉安式まで、時系列でその一連の流れが視覚的に伝わる貴重な記録となっている。

特に住民と御神木との密接な関係にある絵葉書を分析する。

絵葉書 No.21 と No.22 には、森林鉄道の線路を利用して御神木を地元住民が奉遷する場面が写し出されている。木曾川に架かる狭い鬼淵鉄橋の上で、御神木の前後に多くの人々が集まり、息を合わせて慎重に奉曳している光景である。高所での限られた足場に冷や汗を浮かべながらも、参加者たちは神聖な御神木を無事に運び出そうと、不安を抱えつつも誇りを胸に一步一步進んだことだろう。そして鉄橋を渡りきった開けた場所では、多くの人々が御神木を取り囲む姿が広がっている。

絵葉書 No.25 と No.26 は、御神木を積んだ奉遷列車が上松駅を出発する光景を捉えたものである。御神木を乗せた貨車は、榊や注連縄で華やかに飾られ、遠くからでも容易に識別できた。駅のホームには多くの人々が集まり、その出発を見守っている。特に、赤ん坊を背負った女性が御神木に手を合わせて祈る姿が印象的である。御神木を見送るために、多くの学童や生徒たちが小旗を高く掲げ、日の丸が振られる様子は、御神木への誠実な願いを示している。この一連の光景は、地域の人々の御神木に対する大きな尊重を示している。

絵葉書 No.29 と No.30 は、太田町で行われた奉曳の状況を捉えたものである。

町内では御神木を載せた台車が整然と奉曳され、その行列を見守る大勢の人々もまた整然と並ぶ。御神木の前方左には旗を持った指揮官が立ち、その後方には左右に兵士が2人ずつ並んでいる。御神木の四方には、小銃を肩に掲げた兵士が4人配置され、張り詰めた空気が漂う（写真11）。御神木が軍隊の行進のように進む中、両側には多くの人々が集まり、その光景を見守っている。注連縄が張られた通りは人であふれ、至る所に国旗が掲げられ、地域の人々の熱い思いが感じられる光景である。この一枚の絵葉書は、戦時下の軍国主義的な面をリアルに伝えている。



写真11 太田町の奉曳(絵葉書部分拡大)

絵葉書 No.34、No.35、No.37～39、No.42 の6枚は、川下りをする御神木に対する各地での奉迎の状況を捉えている。大勢の人々が川岸に集まり、御神木を迎えるために盛大に出迎えた。御滞泊地や各繫留地では、竹矢来を巡らせて祭場が設けられ、注連縄が張られ、幟や国旗が立てられた。その川岸には御送船が並び、祭事が行われていた。多くの人々が集まり、奉迎のために真心を尽くす様子が伝わってくる。

これらの記念絵葉書は、単なる記録を超え、地域の人々と御神木との深いつながりを克明に物語っている。鬼淵鉄橋での奉曳、上松駅からの出発、美濃太田町での奉曳、そして川下りの御神木を迎える様子など、一枚一枚の写真は、人々の信仰心、伝統への敬意、そして地域全体の団結力を鮮やかに描き出している。特に印象的なのは、上松駅での出発シーン。赤ん坊を背負った女性や子どもたちの姿は、御神木が単なる材木ではなく、地域の人々、とりわけ未来を担う子どもたちにとっても、深く根ざした信仰の対象であることを象徴的に示している。

また、美濃太田町での奉曳は、戦時下における軍国主義の影響を強く感じさせる場面を写し出している。御神木の周りに配置された兵士たちは、奉曳が単なる伝統行事ではなく、国家の威信を高める儀式であることを示している。兵士たちの姿は、戦争の緊張感を醸し出し、参加者に対してもその影響を与えていると言える。御神木を奉遷する人たちとそれを見守る人々が整然と並ぶ様子は、地域の結束や秩序を表している一方で、軍国主義的な規律の象徴でもある。多くの人々が奉曳に集まることで地域社会の結束が強調され、参加者全体が共同の目的のために一丸となっていることが明らかになっている。このような動員は、軍国主義の影響を受けた時代背景において、地元住民が国家や共同体に対する忠誠心を示す場ともなったと考える。

7. 記念絵葉書の考察

帝室林野局が発行した記念絵葉書は、その数の多さやタトウのデザインの細やかさから熱意が強く感じられ、特に御杣始祭に関連した絵葉書の発行枚数は他を圧倒しており、その重要性がうかがえる。川下りの絵葉書では、木曾支局が上流部を、名古屋支局が下流部を担当し、幾つかの写真構図が重なるものの、全体としてバランスの取れた選定がなされ、両局が協力して発行にあたったことが伺われる。また、これらの記念絵葉書は販売用ではなく、帝室林野局の招待者や協力団体に後日配布されたと考えられ、さらに慰問品として戦地に送られた可能性もある。こうした背景から、記念絵葉書は単なる記録としての役割を超え、特別な祭事に対する意義や価値を後世に伝えるための重要な手段であったと言える。

記念絵葉書は、神宮の式年遷宮に関わる重要な祭事を記録・保存する手段として発行されたと考える。御杣始祭は重要な儀式であり、その様子を広く記録・伝達することで、儀式の神聖さと伝統を未来に引き継ぐための目的があった可能性がある。特に昭和16年(1941)という時代背景を考慮すると、国家的な行事としての重みが増していたため、絵葉書を通じてその意義を強調することが期待されたと推測される。

今回の川下げは地元の要望に配慮して行われたが、鉄道輸送の方が安全かつ効率的であることは明らかである。川下げの計画時点で次回の御神木の輸送方法について決定されていたかは不明であるが、河川環境の変化や輸送方法の近代化を考慮すると、川下げは今回限りの特別な行事として行われたと推測される。そのため、その様子を記録した絵葉書が多数発行されたと考える。

記念絵葉書の発行は、記念品としての意味合いが強かったと考える。御杣始祭や御神木奉遷など、特別な祭事に参加できた人々にとって、それを記念するものが求められていた。スタンプやイラストが施されたタトウは、当時の人々にとって儀式の思い出や感動を形に残す手段であり、特別な価値を感じさせたと推測される。特にスタンプが押されることで、その時の体験がより一層記念的であり、所有者にとって誇りとなったと考える。

記念絵葉書には祭事や地元住民の奉遷の様子が写されているが、戦時下を思わせる要素は見受けられない。御神木の奉遷の際、軍国主義を連想させるシーンが一枚だけ存在するが、それは奉遷風景の一部に過ぎず、明確なプロパガンダ的意図は感じられない。戦時下のプロパガンダにおいて、標語は国民の意識を統一し、戦争協力や士気向上を目指す短いスローガンであった。この当時の一部の絵葉書にはこれらの標語が掲載され、戦争の正当性や愛国心を喚起し、資源の節約などのメッセージを無意識のうちに日常生活に浸透させる役割を果たした。しかし、記念絵葉書には標語は印刷されておらず、題名にも宣伝や政治的意図を感じさせる表現はない。これは、皇室と神宮の関係を純粹に強調し、神宮の重要性を伝えることに重きを置いているためだと考えられる。

8. まとめ

記念絵葉書は、御杣始祭と御神木奉遷の重要性を示すだけでなく、戦時下においても人々が文化や伝統を大切にし、未来へ継承しようとする意思を表している。また、これらの絵葉書は、御神木が地域社会で果たした役割や信仰への敬意を今に伝える貴重な記録である。

御杣始祭は神宮式年遷宮に欠かせない御神木を伐採する神聖な儀式であり、その記録や周知を目的に帝室林野局が47枚の絵葉書を発行したことは、祭事の重要性が強く認識されていた証しといえる。帝室林野局は、神宮に必要な御用材を供給する重要な役割を担った。記念絵葉書の発行は、この活動を国民に広く知らせるとともに、同局の使命感や貢献を強調する手段でもあった。絵葉書を通じて、御杣始祭の意義とその背景にある帝室林野局の働きが伝えられたのである。

また、御神木奉遷は、皇室と神道への敬意を高めるとともに、国家の象徴として国民を結びつける重要な祭事だった。地元住民は、この儀式を通じて地域の伝統を守りつつ国家に奉仕する意義を実感し、共同体のつながりを再認識した。さらに、国家が主導する祭事によって、住民は厳しい戦時下でも一時的な喜びと安らぎを得ることができた。

こうした関係性は、戦時下において御神木が宗教的意義を超えた国家の象徴として機能したことを示している。帝室林野局はその管理を通じて国家の意向を示し、地元住民は忠誠を示しながらも祭りを楽しむという形で関わり、御神木は国家の一体性を象徴する重要な存在となった。

参考文献等 ※木曾山林資料館所蔵

上松町誌編纂委員会（2006）上松町誌第三巻歴史編．上松町教育委員会．P498～510

辛木宣夫（1941）神宮正遷宮御造営用材伐出に就て．御料林第157号．P2～7

倉田吉雄・石岡興（1942）昭和二十四年度式年神宮御造営材伐出概要（二）．山林720号．P26～32

倉田吉雄・石岡興（1942）昭和二十四年度式年神宮御造営材伐出概要（一）．山林719号．P26～32

神宮司庁（1986）神宮 第六十一回神宮式年遷宮をひかえて．神宮司庁

神宮司庁（1965）神宮奉祀の伝統※

神宮司庁（1953）第五十九回神宮式年遷宮要解※

神宮司庁広報室（2005）第六十二回神宮式年遷宮 御杣山と関係諸祭・行事について．神宮司庁広報室

帝室林野管理局木曾支局（1941）第五十九回神宮式年遷宮 御造営御杣始祭記念写真帳．帝室林野管理局木曾支局

帝室林野局（1939）帝室林野局五十年史．凸版印刷株式会社

徳川義親（不明）伊勢両大神宮造替遷宮と木曾山．不明

嶺本孝治（1942）昭和十六年第五十九回御神木木曾川御川下げの概要．御料林第164号．P78～81

文部省（1943）初等科国語五．文部省

別紙1

三 木曾の御料林

神宮備林

皇大神宮は、二十年ごとにあらたに御殿舎を御造營になり、そのたびに正遷宮の御儀が行はれる。

この御儀は、天武天皇の御時に定められ、第一回の大典は、持統天皇の御代に行はれた。昭和二十四年は、第五十九回の正遷宮に當るが、實に一千二百有餘年の歴史を重ねてゐる。

あらたに御殿舎を御造營になる用材は、もと伊勢の神路山・高倉山などから伐り出されてゐたが、織田信長が、木曾の森林から伐採して奉つたことがあり、その後百年餘りたつて、それが例になるやうになつた。明治の大御代から昭和の今日まで、御遷宮に際しては、かならず木曾から御用材を奉ることになつてゐる。

神宮の御殿舎は、すべて檜の白木造りであるから、

御造營に要する檜の数は、一萬二千本に近く、しかもすべてえりすぐつた良質のものである。かうした檜は、一朝一夕に得られるものでなく、したがつて、つねに大木を保護するとともに、植林によつて、あとからあとから育てて行くやうにしなければならぬ。

明治三十七年、明治天皇は、特にこのことに大御心をかけさせられ、そのおぼしめしによつて、木曾の御料林中に、神宮備林が定められることになつた。以來、神宮御造營の用材は、永久につきる心配がなくなつたのである。

この神宮備林は、木曾川の上流が、白い御影石の川床をかんで流れる木曾谷の左右の山々にある。

今、中央線の上松驛で汽車をおり、森林鐵道に乗りかへて、木曾川の支流にそひながらさかのぼつて行くとき、しばらくは、切りそいだやうながけの下の青い淵や、

勢こんで流れる水の清さに、目をうばはれるのであるが、やがて、左右を取り巻く山の木々に、われわれは目を移すやうになる。窓の外のけしきは變つても、山から山へ續く生ひ茂つたみどりの森林は、つきることがない。何といふ森林のつらなりであらうとおどろくころは、まだ御料林のほんの入口へはいつたばかりなのである。

このやうにして、山を分けながら谷間をのぼつて行くと、やがて標高千百五十メートルの中立神宮備林なかだちに着く。ここは、昭和十六年六月三日、神宮御造營用材中いちばんだいじな、内宮ないくう・外宮げくうの御神木を伐り出したみそまはじめ祭の行はれたところである。

みそまはじめ祭

青々と大空をおほふ檜の大木が、美しい柱のやうに立つてゐる中立神宮備林の朝である。やまがら・こまどり・うぐひすなどの鳴き聲が、谷川の音にまじつて聞え

て来る中を、今日のみそまはじめ祭の盛儀を拜観する人々の列が、林の間の細道傳ひに次から次へ續いて行く。しめなは・まん幕を張りめぐらした祭場は、檜のあら木造りで、内宮・外宮の御神木の前に南面して作られてゐる。

木の間からもれる初夏の光に、まばゆくかがやく祭場の東から南へかけた林の傾斜面は、拜観者や、青年學校・國民學校の生徒などで、うづめつくされてゐる。深山みやまの靈氣れいきに打たれて、だれ一人静けさを破る者はない。きちんと姿勢を正して、祭典の始るのを待つてゐる。

午前十時、最初の太鼓たいこが、あたりの静けさを破つて鳴らされる。それを合圖に、身も心も清めに清めて、ひたすら今日を待つてゐた奉仕員たちは、目にしみるばかりの眞白な齋服さいふくを着て、定め場所へ集つて來た。

やがて第二の太鼓が山全體に響き渡つて、儀式に使は

れるいろいろな祭具が運ばれる。最後の太鼓が打ち鳴らされると、奉仕の人々は、はらひ所に並んでおはらひを受け、祭具やお供へものをささげて、静かに祭場へ進んで行く。

祭場には、中央と四すみに、五色の幣へいがかうがうしく立てられてゐる。大麻を振つて祭場が清められ、おごそかに祝詞のりとが讀まれる。

いよいよ、御神木伐り始めの御儀に移つた。

奉仕員は、をのを取つて御神木の前方南寄りに進み、大麻でおはらひをする時のやうに、左右左と三たび、御神木の根もとへ向かつてをのを打ち込む。をの入れを終つて、奉仕の人々は、一拜して静かに祭場を退出した。

内宮・外宮の御神體を奉安する御神木伐り始めの御儀は、かくて終つたのである。

しめなはでかざられた、樹齡じゆれい二百數十年に及ぶ二もと

の御神木を仰げば、天を指してすくすくと生ひ立つ幹は長く、はるかに冠かんむりのやうな梢をいただいてゐるのが見られる。十萬五千町歩にわたる木曾きその御料林中、最良の檜である。

午後になつて、この御神木は、さらに白衣を着た十四名のえり抜きえり抜きのそま夫たちによつて、伐られて行つた。

伐り方は古式にしたがつて、御神木の根もとへとぎすましたをのを、はつしと打ち込むのである。しはぶきの聲一つしない、神代さながらの山中は、しばらくの間、打ち入れるをのの響きのこだまで満たされる。一打ちごとに、三つの切口から清らかな木のはだが現れる。

切り倒された御神木は、用材の長さに切られ、六十名の運材夫によつて木馬に乗せられ、木馬道を静かに運ばれて行く。運材夫が聲高く歌ふ木やり歌は、中立神宮備林の森嚴な空氣を明かるくふるはせて、いつまでも響き渡つた。

別紙2

第五十九回神宮式年遷宮御造営御杣始祭・御神木奉遷記念絵葉書

絵葉書No.	絵葉書の題名	要約	絵葉書の種別
1	参列者林鉄へ乗車	上松駅に隣接する小川森林鉄道の起点。貨車にも多数の人が乗込む	御杣始祭記念
2	参列者の行列	小川森林鉄道終点の赤沢停車場から祭場まで約2Kmの山道を歩く	御杣始祭記念
3	準備なりたる祭場全景	古式ゆかしい縄結びで釘を用いない荒木造りの内宮・外宮の祭場、手前の建物が奉仕員更衣室、右手に参列者休憩所	御杣始祭記念
4	特別拝親席	特別拝親席の前方が内宮祭場で右側に内宮御神木	御杣始祭記念
5	皇大神宮御神木	当日の頒布品	記念品
6	内宮御樋代木	樹高30m、胸高直径59cmの内宮御神木	御杣始祭記念
7	豊受大神宮御神木	当日の頒布品	記念品
8	外宮御樋代木	樹高31m、胸高直径35cmの外宮御神木	御杣始祭記念
9	修葺場	大麻と塩を用いて、忌物や新しい供え物、また関係する人々を清める	御杣始祭記念
10	着座（外宮祭場）	祭事の始まり	御杣始祭記念
11	斧入れの儀	御神木の根もとへ向かつて忌斧を左右左の三度打ち込む儀式	御杣始祭記念
12	内宮御樋代木の伐採	祭事終了の正午すぎから、14名の杣夫は2班に分かれて御神木に斧を振り、約1時間で伐倒された	御杣始祭記念
13	外宮御樋代木の伐採	外宮御神木も同じ方法で斧を入れ伐倒された。御杣始祭記念絵葉書タウのイラストの基となった写真	御杣始祭記念
14	木馬運搬	伐倒後、玉切りなど措置された御神木は、運材夫60名により真新しい木馬に寄せられ大切に作業軌道まで曳行された	御杣始祭記念
15	御樋代木の貨車積込	木馬から軽荷重で一時的な作業軌道下の貨車に積み込む	御杣始祭記念
16	御樋代木の軌道乗下	作業軌道を約2Km下流の赤沢伐木事業所まで小型機関車で曳行する	御杣始祭記念
17	御樋代木奉安所	御神木は、赤沢伐木事業所に造られた奉安所に安置された	御杣始祭記念
18	9月5日奉遷式(1) 赤澤奉安所附近	奉安所から小型機関車で本線へ移動する	御神木奉遷記念
19	9月5日奉遷式(2) 赤澤停車場に於ける編成	蒸気機関車に御神木の運搬車が連結され、注連縄や神旗が飾られる	御神木奉遷記念
20	9月5日奉遷式(3) 森林鉄道輸送	手前の蒸気機関車には多くの乗客を乗せた客車を連結し、その前面に国旗が飾られている。次の蒸気機関車が御神木を牽引しており、その後ろの蒸気機関車も客車を連結している。写真撮影のポイントで、停車しての記念撮影	御神木奉遷記念
21	9月5日奉遷式(4) 鬼淵鉄橋上を各種団体奉曳	木曾川に架かる鬼淵鉄橋の上を、御神木の前後には多数の人々が整然と並んで、力を合わせて奉曳している	御神木奉遷記念
22	9月5日奉遷式(5) 上松到着	線路上を奉曳される御神木の周囲には、道を埋め尽くすほどの人が集まっている	御神木奉遷記念
23	9月5日奉遷式(6) 上松奉安所	上松運輸出張所に設けられた奉安所	御神木奉遷記念
24	9月5日奉遷式(7) 上松奉安所に於ける浦安の舞	4人の巫女による平安を祈願するための神楽舞	御神木奉遷記念
25	10月5日奉遷式(8) 省線上松駅に於ける奉遷列車	御神木を乗せた貨車は、辮や注連縄で飾られ、遠くからでも判別でき、駅のホームで多くの人がその出発を見守った	御神木奉遷記念
26	10月5日奉遷式(9) 奉遷列車上松駅発車	御神木に日の丸の小旗を振りながら見送る多くの小さな子どもと学生	御神木奉遷記念
27	御樋代木美濃太田駅へ御着 昭和16.10.5.	駅のホームで御神木の出迎え	御樋代木奉遷記念
28	美濃太田駅にて奉曳車に積込 昭和16.10.5.	御神木を貨車から下ろし、台車に載せる	御樋代木奉遷記念
29	10月5日奉遷式(10) 岐阜県美濃太田町に於ける奉曳	町内を御神木載せて台車を奉曳する行列と見守る人々	御神木奉遷記念
30	太田町の奉曳 昭和16.10.5.	御神木を奉曳する大勢の人とそれを両側から見守る大勢の人	御樋代木奉遷記念
31	10月6日奉遷式(11) 美濃太田町に於ける木曾川へ水入れ	木曾川岸辺から御神木を木曾川へ入れる	御神木奉遷記念
32	太田町にて木曾川へ水入れ 昭和16.10.6.	川入れ後、御神木を小舟の片側へ固定する	御樋代木奉遷記念
33	坂祝村附近川下げの状況 昭和16.10.6.	木曾川を、小舟が連なって下る	御樋代木奉遷記念
34	10月6日奉遷式(12) 犬山町附近流道	御神木奉遷記念絵葉書タウのイラストの基となった写真	御神木奉遷記念
35	犬山町に御滞泊 昭和16.10.6.	木曾川に面した小高い丘の上に建つ犬山城の天守	御樋代木奉遷記念
36	笠松町附近川下げの壮観 昭和16.10.7.	木曾川を、御神木の小舟が列をなし、川面の霧の中を進む	御樋代木奉遷記念
37	笠松町の奉迎 昭和16.10.7.	大勢の人が出迎える	御樋代木奉遷記念
38	奥山町の奉迎式 昭和16.10.7.	川岸に御送船を並べての神事	御樋代木奉遷記念
39	起町に御滞泊 昭和16.10.7.	川岸に御送船を並べての神事	御樋代木奉遷記念
40	長岡村に御休憩 昭和16.10.8.	小舟の集団は、分けたり合流したりしながら、木曾川を下る	御樋代木奉遷記念
41	10月8日奉遷式(13) 船頭平開門入航	木曾川と長良川の間をつなぐ開門(水位を調整する施設)を通過する	御神木奉遷記念
42	桑名市一ノ鳥居に於ける奉迎の実況 昭和16.10.8.	川岸に御送船を並べての神事	御樋代木奉遷記念
43	10月9日奉遷式(14) 桑名貯木場へ御到着	御樋代木奉遷記念絵葉書タウの「六一」のイラストは、この様子を基にして描かれたと推測	御神木奉遷記念
44	桑名貯木場に御到着 昭和16.10.9.	桑名貯木場に到着した御送船は、御神木を荷解きする	御樋代木奉遷記念
45	10月9日奉遷式(15) 桑名奉安所	桑名奉安所の建物	御神木奉遷記念
46	桑名奉安所 昭和16.10.9.	水面上の柱で支えられた屋根の下、御神木は雨風から守られる	御樋代木奉遷記念
47	桑名貯木場に於ける奉安式 昭和16.10.9.	桑名奉安所の建物と神事。	御樋代木奉遷記念

第五十九回神宮式年遷宮御造営御杣始祭・御神木奉遷記念絵葉書



絵葉書No. 1



絵葉書No. 2



絵葉書No. 3

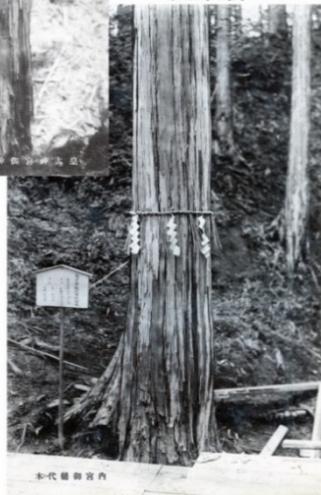


絵葉書No. 4



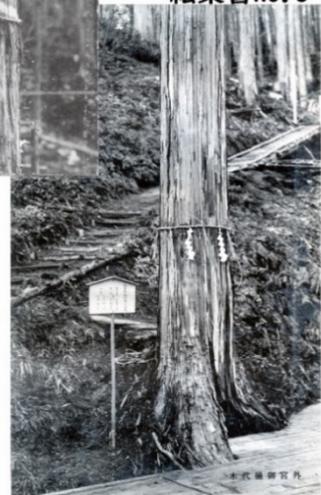
絵葉書No. 5

絵葉書No. 6



絵葉書No. 7

絵葉書No. 8



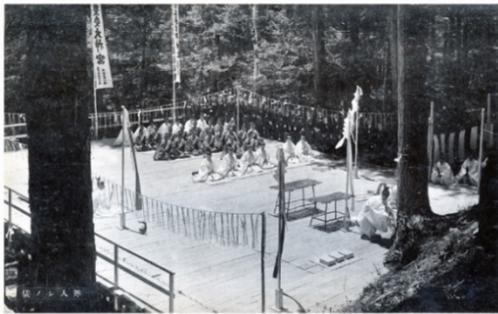
第五十九回神宮式年遷宮御造営御杣始祭・御神木奉遷記念絵葉書



絵葉書No. 9



絵葉書No. 10



絵葉書No. 11



絵葉書No. 12



絵葉書No. 14

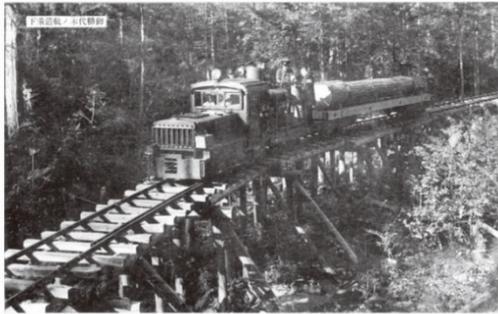


絵葉書No. 13

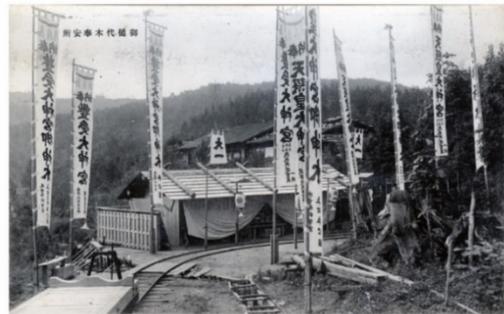


絵葉書No. 15

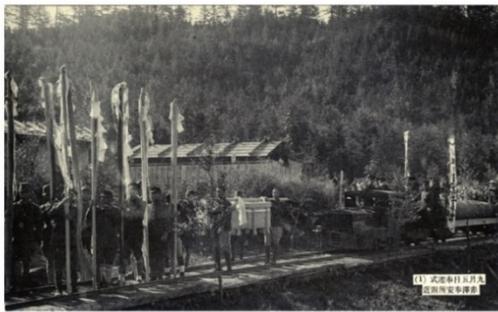
第五十九回神宮式年遷宮御造営御杣始祭・御神木奉遷記念絵葉書



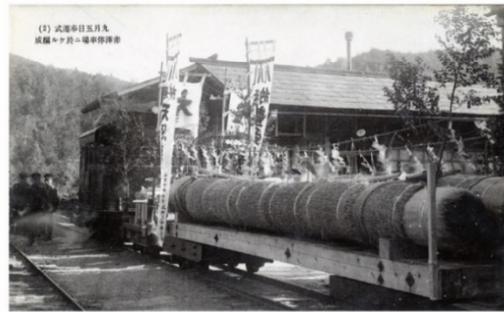
絵葉書No. 16



絵葉書No. 17



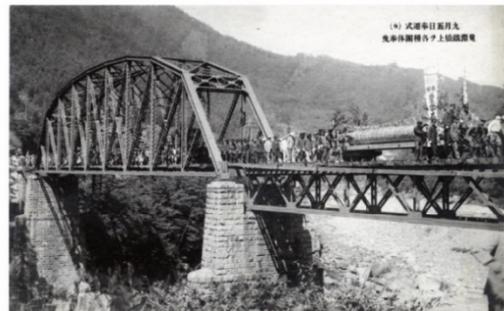
絵葉書No. 18



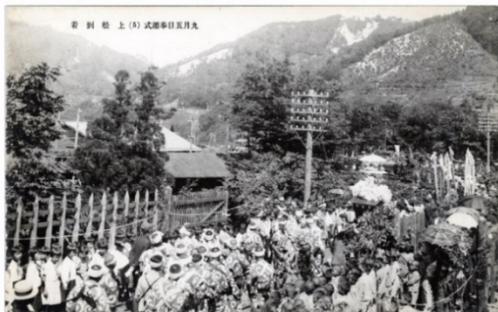
絵葉書No. 19



絵葉書No. 20



絵葉書No. 21



絵葉書No. 22



絵葉書No. 23

第五十九回神宮式年遷宮御造営御杣始祭・御神木奉遷記念絵葉書



絵葉書No. 24



絵葉書No. 25



絵葉書No. 26



絵葉書No. 27



絵葉書No. 28



絵葉書No. 29



絵葉書No. 30



絵葉書No. 31

第五十九回神宮式年遷宮御造営御杣始祭・御神木奉遷記念絵葉書



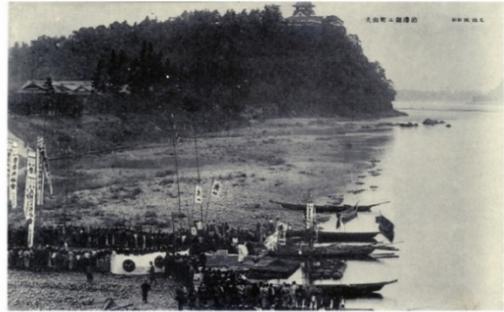
絵葉書No. 32



絵葉書No. 33



絵葉書No. 34



絵葉書No. 35



絵葉書No. 36



絵葉書No. 37



絵葉書No. 38

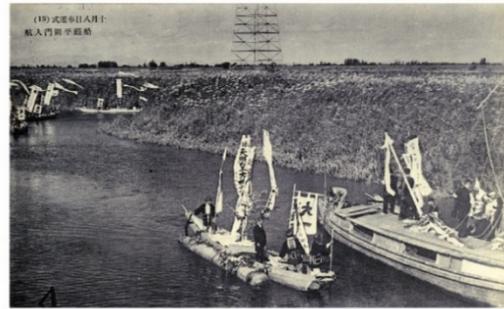


絵葉書No. 39

第五十九回神宮式年遷宮御造営御杣始祭・御神木奉遷記念絵葉書



絵葉書No. 40



絵葉書No. 41



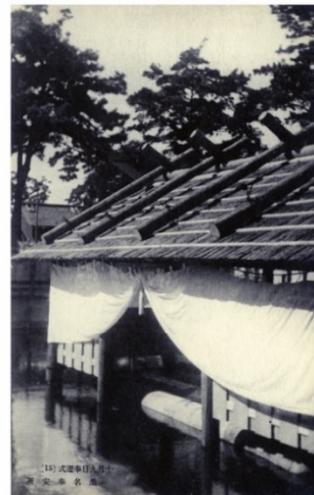
絵葉書No. 42



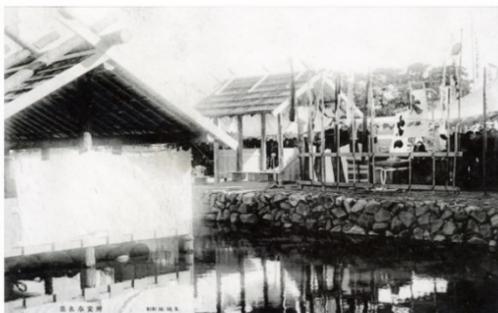
絵葉書No. 43



絵葉書No. 44



絵葉書No. 45



絵葉書No. 46



絵葉書No. 47